

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

八木 達祐

【所属】(助成決定時)

立命館大学大学院先端総合学術研究科

【研究題目】

語られない暴動の記憶に関する観光人類学的研究: ケニアのスラムツーリズムを事例に

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、ケニアの首都ナイロビのキベラで展開する「スラムツーリズム」を事例に、キベラの住民たちが観光案内の中で「暴動の記憶」に関する説明を避けることの論理を分析することである。ケニアでは2007年の大統領選挙に端を発した暴動(post-election violence)によって多くの避難民と犠牲者が出ており、とくに都市部の「スラム」地域の生活は大きく再編されている。本研究ではこの暴動経験と観光の展開の関係性について考察する。まずキベラのツアーガイドを対象とした聞き取り調査を行い、彼らが暴動の話題について沈黙する理由を探究する。次に暴力や紛争に関連する観光学の理論を整理した後、「暴動の観光化」が展開する南アフリカの「スラムツーリズム」との比較分析を行う。以上を通じて、暴動後のケニア社会における「スラムツーリズム」の実態や課題を把握する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

1) 聞き取り調査

キベラの住民たちが観光案内の中で選挙後暴動の経験について沈黙する理由を把握するために、オンラインでの聞き取り調査を行う。本調査ではキベラで暮らすツアーガイドを対象とし、これまでのフィールドワークから既に収集した量的データを踏まえつつ、暴動に関する語りを重点的に収集する。とくに彼らの暴動時・暴動後の個人的経験や暴動経験に対する現在の意識に焦点を当てる。

2) 比較分析と文献調査

暴動経験に関する語りが慎重に避けられているケニアのツアーに対して、南アフリカのタウンシップで展開するツアーでは、観光客の訪問地のほとんどがアパルトヘイト政策やその後の抵抗運動の歴史に関連した場所に集中しており、反アパルトヘイト闘争の観光化が大規模に展開している。そこで本研究では、この違いが何に起因するのかを考察する。まずこれまでの現地調査を通じて収集したものの未整理であった南アフリカのケープタウン、ジョハネスバーグのタウンシップツーリズムに関する一次データと先行研究の研究成果を総合し、ツアーの展開状況を解き明かす。次に暴力と紛争に関する観光学の書籍・論文を精読し、関連する理論を整理する。その後導き出された理論的枠組みを用いて、ケニアと南アフリカ両者の共通性や異質性を分析する。

【結論・考察】(400字程度)

聞き取り調査では、主に選挙後暴動による被害や抵抗運動参加時の様子、暴動経験に対する現在の心境、住民間での暴動の語り方や配慮の仕方等に関する個人の語り収集された。収集された語りからは、「暴動の記憶」が観光地域の各所に刻まれていること、住民たちが選挙後暴動に対してさまざまな立場で生きていること等の結果が示され、ツアーガイドたちが暴動の話題について沈黙する理由の一端が確認された。

比較分析からは、南アフリカのツアーでは、反アパルトヘイト運動の中心地であったタウンシップをポストアパルトヘイトの「自由」や「新しい南アフリカ」を象徴する地域として紹介する話法が広く定着しつつある状況が確認された。さらに暴力と紛争に関する観光学研究の文献調査を通じて、近年欧米圏を中心に増加する「ポストコンフリクト・ツーリズム」に関する議論と接続し、研究を進展できる可能性が確認された。